

## 【資料紹介】 宇久島・長崎鼻遺跡出土の丸ノミ形石斧

川道 寛

### はじめに

今回紹介する丸ノミ形石斧は、五島列島宇久島在住の郷土史家瀬尾泰平氏の採集品である。氏によると発見したのは相当以前になるらしい。瀬尾氏のもとには幾人もの研究者が訪れ、収集資料を観察しているが、この石斧は知られていなかったらしい。1998年熊本大学の木下尚子教授によって再発見され、同氏によって実測されたという話を筆者は人づてに聞き込んだ。その後筆者は宇久島に瀬尾氏を訪ね、資料を実見する機会をえ、改めてその重要性を認識した。本資料は丸ノミ形石斧の分布の問題やその機能などを考える上で有益と考えられる。

### 1. 長崎鼻遺跡

石斧が採集された長崎鼻は、宇久島の東端に突き出た岬である。玄武岩の溶岩流を基盤とし、それを覆って厚い砂層がある。現在の地目は草原で、牛の放牧場となっている。

長崎県の遺跡地図では、この岬に旧石器時代から古墳時代にいたる8箇所の遺跡があげられており、岬全体が遺跡と言っても過言ではない。丸ノミ形石斧が出土した地点は採集した瀬尾氏によれば、長崎鼻の先端であったとのことである。石斧単独の採集であったらしい。県の遺跡地図に該当する遺跡はみあたらない。宇久島には縄文時代草創期の遺跡としては、土器と細石器が共伴した城ヶ岳平子遺跡、いわゆる「神子柴系」の石槍や局部磨製石斧を出土した大浜遺跡・祝賀遺跡などがある。

### 2. 丸ノミ形石斧について

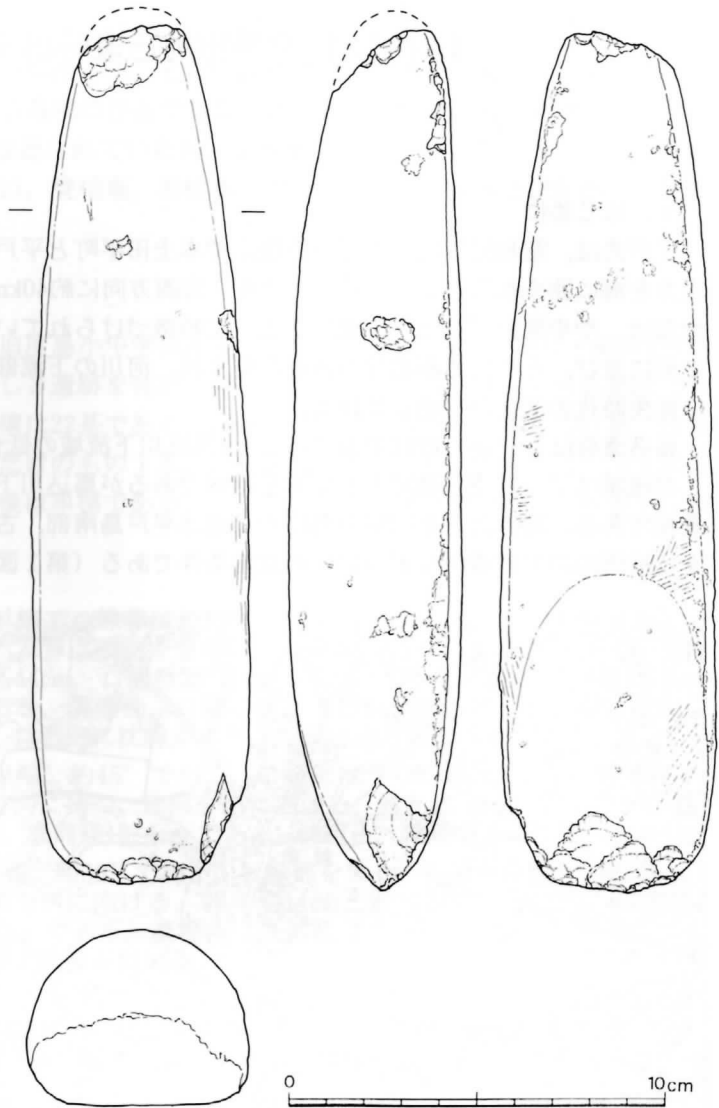
この丸ノミ形石斧は、現長22.7cm、最大幅5.7cm、最大厚さ4.5cmを測る。重さは計測していないがずっしりとした重量感がある。基部をわずかに欠損するがほぼ完形である。基部側がすばまり、最大幅を刃部近くにもつ。断面はカマボコ状をなし、裏面は刃部の凹みから基部側を平坦に仕上げている。置いたときの安定感がある。全体を敲打によって整形した後、丁寧に研磨し仕上げている。刃部の裏側に凹状の抉りを入れて丸ノミ状に加工している。硬質の砂岩系の石質で、色調は淡黄色を呈する。刃部の表裏に小剥離が入っており、



遺跡位置図

使用痕であろう。本例は、基部の突起を除けば、鹿児島県梶ノ原遺跡出土のものと形態的に類似しており、その一員に入ると判断してもよさそうである。

この種の丸ノミ形石斧は近年鹿児島県を中心に発見が相次いでいる。鹿児島県梶ノ原遺跡では薩摩火山灰（11000年 BP）の下層から隆帯文土器に伴って出土しており、その編年的位置づけが草創期までさかのぼることとなった。また小田静夫氏は「梶ノ原型石斧」を集成し、「黒潮圏の丸ノミ形石斧」とよび、丸木舟の製作工具と評価され一躍注目を浴びることとなった（小田1994）。これには内陸部にも出土することから慎重な見方もある（東1996）。また県内では長崎市柿泊遺跡からも出土している（宮下・高田1997）。刃部みでの出土で全体の形状は不明であり、また刃部裏側に凹状の加工もみられないが、この種の石斧として差し支えないだろう。



丸ノミ形石斧実測図

**謝辞** この資料紹介は、石斧を採集された瀬尾泰平氏の全面的なご好意によるものである。氏の採集活動は宇久島を拠点に近隣の島々におよんでおり、膨大なコレクションである。ほとんどが紹介されておらず、その資料的価値は計り知れない。実測図の使用を許可していただいた木下尚子氏、再発見の一報をいただいた中島真澄氏など多くの方々にお世話になった。記して謝意を表します。

【引用・参考文献】

- 加世田市教育委員会 1998『梶ノ原遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(15)  
 小田静夫 1994「黒潮圏の丸ノミ形石斧」『南九州縄文通信』No.8  
 春成秀爾 1998「鹿児島県の丸ノミ形石斧2例」『南九州縄文通信』No.12  
 東 和幸 1996「加工具 —鹿児島県内の石斧について—」『旧石器から縄文へ』  
 鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会  
 宮下雅史・高田美由紀 1997『柿泊遺跡』長崎市教育委員会